要　旨

微視（ミクロ）の歴史学研究
―江戸時代の民衆生活を考える―

内　田　鉄　平

本発表要旨は2013年６月22日、別府大学で行われた史学研究会の講演をまとめたものです。講演の内容は、自身の研究分野である江戸時代の民衆生活史についての研究方法やこれまで資料館勤務による展示経験を踏まえ、私自身の研究方法である微視の歴史学研究がどういったものかを紹介したものです。

私は別府大学文学部史学科に入学し近世史研究室に入りました。そこで指導していただいた後藤重巳先生や諸先輩方が古文書をスラスラと読んでいるのに圧倒されつつ、先生や諸先輩の指導のもと卒業論文を書く頃には少し読めるようになりました。江戸時代の民衆生活を紐解くには記録された資料である古文書を解読しなければなりません。

江戸時代になるとそれを記録するための紙も必要でした。「紙の大量消費時代」が到来します。武士は城下町、農民は村で生活するという新たな支配体制によって、村には庄屋（名主）が置かれ、庄屋に年貢納入を委任する代わりに、村運営はある程度の自由を認める、村請制が確立します。庄屋は支配者である領主とのやり取りを行うためや公務を記録するため多種多様な文書を作成し、保存します。それら今日、古文書として扱われる史料からは書き手の社会が垣間見られます。

現在、日本各地には大量の古文書が残されています。そのことは江戸時代の支配体制を可能にした庶民の豊かな文化教養を窺うことが出来ます。江戸時代の民衆の識字率は驚くほど高かったと指摘されています。その理由には民間の教育機関である寺子屋がかなりの数存在したのではないでしょうか。寺子屋によって農民や商人なども文字によるお互いのやり取りや読み書き算術で記録する文化が生まれます。

別府大学附属博物館にも沢山の古文書が所蔵されており、そのなかで豊後国日田郡五馬市村文書と出会いました。家や村で起こる様々な出来事や事件、江戸時代の村の世界、民衆世界に圧倒された私は卒業論文で村の研究を始めます。出来るだけ詳細に、村人たちの顔が浮かぶように考える、これが微視の歴史学研究だと思います。私はこの研究スタイルを続けていきました。2002年に別府大学に提出した修士論文も五馬市村をテーマに、2006年、専修大学に提出した博士論文、2012年それをまとめて出版した『近世村社会の変容』（日本経済評論社）でも五馬市村で起こる様々な問題を取上げ、家や家族、村で起こる些細な出来事や変化が社会の変容を反映していることも明らかにしました。

また江戸時代の旅行についても研究を進めています。江戸時代中期以降、民衆世界に旅行ブームが到来しました。私は旅行する個々の様子を取上げることで江戸時代の全体の旅行文化や地域社会の実情を検討しています。旅行者も旅行から戻れば村人になります。

微視にこだわる研究方法はまさに江戸時代が記録する時代となり、民衆世界にも文字で記録する豊かな文化が花開いていたことが前提です。家や家族など個々の僅かな変化がその後の変容の兆候を示すこともあります。無名な書き手によって記録された史料から見える江戸時代の社会に魅力を感じています。微視の視点ではありますが、実は微視の出来事は社会全体の問題を投影することもあるのです。

また埼玉県の八潮市立資料館では凡そ四年間にわたり、学芸業務や文書保存専門員として勤務していました。地域の資料館での勤務経験は、自分自身の研究に対する視野をさらに広げてくれました。そこで生活する人々を描く歴史学、「地域社会」を意識して展示の企画を作り、地域の歴史・文化に添った形で展示を行いました。

現在、私は山口県宇部市で住職の妻とともに地域文化発展のお手伝いをしています。宇部市は大正10年宇部村から石炭産業によって一躍宇部市となります。今後は近代社会へと変容する地域社会の姿を石炭産業の歴史を追いながら研究を進めていきます。もちろん微視の世界から。